

世紀末ウィーンを焦点にした近代建築運動にみる「ウィーンの」なるもの

序論

1. 研究背景

現オーストリア共和国の首都ウィーンの文化に関する研究は、カール・E・ショースキーが1961年から随時発表した「世紀末ウィーン」研究¹をきっかけに様々な分野で行われ、建築も例外ではない。しかし20世紀、とくに第二次世界大戦以降、ウィーンの文化は低迷してしまっていると評されることが少なくない。²しかしその建築文化はオーストリア国外に目を向ければ、リチャード・ノイトラ、バーナード・ルドフスキーなど諸外国に渡った者たちによって広く世界に影響を与えている。さらに、1960年代以降はハンス・ホラインなど、世界的に設計活動を行った建築家も再び現れた。

本研究で扱うウィーン出身の建築家に関しては、近年個別に研究が進められつつある。しかしウィーン出身の建築家たちを一貫して俯瞰する研究はなされておらず、また近代建築運動を捉えるにあたって、19世紀以前への歴史の遡及が十分でないのが現状である。

2. 研究目的

本論文の大きな目的は、「世紀末ウィーン」という時代を焦点にして、19世紀以前から20世紀までのウィーン出身の建築家の設計思想を俯瞰して捉えることにより、近代建築運動の新たな一面を明らかにすることにある。またそれによって「世紀末ウィーン」という一つの時代を焦点として近代運動を捉えることの意義を示したい。

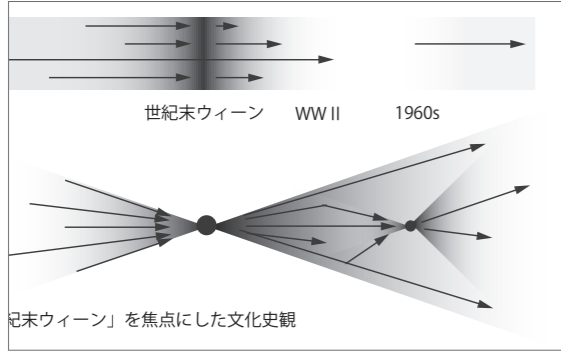


図1 研究ダイアグラム

3. 研究方法と論文構成

第1章で世紀末ウィーン文化の成立背景として、ウィーンの都市・建築史の概要を紀元前から19世紀末まで把握する。第2-5章で、ウィーン出身の建築家について、19世紀、世紀末ウィーン、20世紀（第二次対戦前と後）に分けて、個別にその設計思想とウィーンの文化との関連を述べる。最後に、第6章で前章までを基にした考察として、世紀末ウィーン文化の特徴とその構造的な成立背景及び、19-20世紀の近現代建築運動におけるウィーン出身の建築家の特徴を述べる。



図2 カールス教会

図3 ロースハウス

図4 ハースハウス

本論

1章 ウィーンの都市・建築史

ウィーンは古代ローマ時代に建設された都市壁が、数回の改築を経て19世紀半ばまで維持されてきた。都市壁内の中心市街地は約3kmしかなく過密化が進んだ一方、都市壁から半径約2kmが16世紀に建設禁止区域に指定された。ここはグラシーと呼ばれ、緑の広がる憩いの場としての役割も果たした。都市壁は1850年に撤去が決まり、半世紀をかけて環状道路リングシュトラッセとして大規模に再開発された。建築設計はルネサンス時代まで、イタリアをはじめ外国より招聘した建築家に頼っていたが、ゴシック時代に入るとフィッシャー・フォン・エルラッハ³らローマで学んだウィーン出身の建築家も活躍しはじめた。リングシュトラッセの建設計画ではデンマーク出身の建築家テオフィール・ハンセンが《国会議事堂》を設計する⁴など、異文化を容易に受け入れる風土があった。ウィーン町並みにはロマネスク様式の教会を増改築したゴシック様式の《シュテファン大聖堂》や、世界各国のモチーフが引用された《カールス教会》、そしてリングシュトラッセの建築群があり、多種多様な様式が建築・都市の中に共存している。

2章 19世紀の先駆的建築家

世紀末文化に大きな影響を与えることになる19世紀ウィーンの建築家の理論と思想の特徴を抽出した。ゴットフリート・ゼンパー⁵の「芸術は唯一の主人を知っている。それは必要である」⁶とする理論は近代建築の先駆けとなったが、古典的建築と近代建築の過渡期における矛盾に悩み、その解決は成し得なかった。アロイス・リーグル⁷の「芸術意志」の概念や『現代の記念物崇拜』⁸から、絶対的な価値判断基準を定めるのではなく、対立する二つものをいかにして同居させるかという実利的な立場を読み取ることができた。カミロ・ジッテ⁹は幾何学的な平面計画による同時代の都市計画を批判し、文字通り人間の視線に立った都市計画を提唱した。

3章 世紀末ウィーンの建築家

オットー・ワーグナー¹⁰はゼンパーの言説を言い換えて「芸術は必要にのみ従う」と宣言し、「われわれの能力や生き方を表わす」¹¹ものでさえあれば、その形式は問わなかった。アドルフ・ロース¹²は前世代の建築家から受け継いだ実利的な思想を先鋭化し、「装飾は犯罪である」と述べた一方で、古代ギリシャ・ローマ、ウィーンの伝統との文化的な繋がりを重要視していた。また、ウィーン分離派、建築家ではないが建築を設計したルドルフ・シュタイナー¹³、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン¹⁴らの概要に触れた。

4章 20世紀の建築家1 (~WW II)

ヨーゼフ・フランク¹⁵は、住宅の均質化やモダニズムを批判し、多様性を求めた¹⁶。また、公と私という相反する性格を両立させるため、カーテンを始めとするテキスタイルを効果的に用いた。ルドルフ・シンドラー¹⁷は「『建築』は私たちの時代に生まれた」¹⁸と

宣言し、近代とそれ以前の歴史の連続を完全に否定した。さらに、モダニズム建築の隠された形式性を見抜き、批判した。リチャード・ノイトラ¹⁹は環境デザインの先駆者と位置づけられている²⁰が、彼は設計を精神分析学に基づく治療と重ねあわせており、ウィーン出身の建築家のなかでも異質のものと位置づけられる。

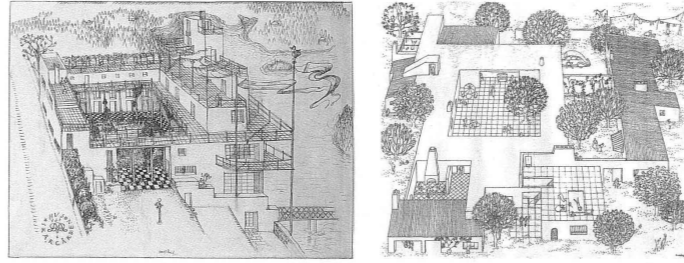


図5 フランクの住宅設計案

図6 ルドフスキーの住宅設計案

5章 20世紀の建築家2 (WW II ~)

バーナード・ルドフスキー²¹の活動の背景には、世紀末ウィーンにおける古代建築への関心があった。²²またルドフスキー自身は設計にあたってウィーンの建築家から意匠的なアイデアを得ていた。(図5,6) クリストファー・アレグザンダー²³の『パタン・ランゲージ』²⁴には『建築家なしの建築』²⁵との形式的な類似がみられる。²⁶ ハンス・ホライン²⁷は構造ではなく芸術的な価値を重視する点がロースやシンドラーらと共通している。また多用するメタファは実用面を考慮したものだった。彼は自身の設計の二面性に肯定的であった。²⁸ コーブ・ヒンメルブラウ²⁹の変化する建築への関心の背景には、建築が人間に合わせるべきであるとする人間中心の思想があった。³⁰

6章 考察 「ウィーンの」なるものとその後構造

20世紀の建築家にみるウィーン精神の継承と展開

既往研究では、伝統的なウィーン建築、ワーグナー、ロースの特徴に「異種なるものの共存」「快適性の重視」「実利を重視する点」などが挙げられている。³¹それらが20世紀以降の建築家にも共通することを確かめるため、各建築家の言説から「同時代建築批判」と「快適性」に関する言説を抽出した(裏面図1)³²。そこから、「ウィーンの」なるものとは、具体的に以下の2点に集約された。

①建築を人間文化の中に位置づけ、生活空間の快適性を重視する

②理論や様式の表現が目的化した建築を批判し、実設計において①が達成されることを重視する

彼らの主張する快適性には、人間主観における審美性も多分に含まれている。またホラインの人間の感覚を意識すべきとの主張や、ヒンメルブラウの建築が人間に合わせるべきだとする主張は、①をより先鋭化したものと位置づけられる。

また、20世紀以降、国外で活躍した建築家たちは「異文化を取り入れる」という近代化によって失われたウィーンの伝統を自ら実践しているとも位置づけられる。

世紀末ウィーンの背後構造 時間・空間の圧縮

1章からは、ウィーンの地理・政治的な条件による多民族化と、過密都市としての性質が明らかになった。19世紀、都市内部では近代経済が急速に発展したが、周辺地域に目を向けると、ユダヤ人によるゲマインシャフトの農村が数多く残っていたという³³。世紀末ウィーンでは極端な時間・空間の圧縮という背後構造があったのである。そのため建築家たちは、理論と現実の不整合を目の当たりにし、複数の価

値観の統合のため①②の実践を行わざるを得なかったと考えられる。

結論

ウィーン出身の建築家たちの設計思想は、ウィーンの特徴的な都市・都市圏・地理の構造に背景があった。さらに19世紀末ウィーンの近代批判的な文化は、中心市街地の急速な近代化と同時に、周辺地域の前時代的農村の価値観にも触れていたことによって培われたものであった。そして建築における「ウィーンの」なるものは、人間文化のなかに建築において快適性を重視し、理論や様式よりも実設計を重視する姿勢にあった。これは20世紀以降にオーストリア国外で活躍した建築家にも引き継がれており、ウィーンという「地域」に着目するだけでは見えてこない文化の継承を、「世紀末ウィーン」という時代に焦点をあてることで明らかにすることができた。

1 研究は1979年に書籍としてまとめられた。邦訳書は訳：安井琢磨『世紀末ウィーン』岩波書店、1983 2『世紀末ウィーンのユダヤ人』(訳：桑名映子、刀水書房、2007)を書いたS・ペラーは「ウィーンは第二次大戦の終結以来、知的・文化的中心都市としての重要性を失っていった。」(p.292)と述べている。3 Fischer von Erlach, 1656-1723 4 Teophilus Hasen, 1813-1891、リングシュトラッセ治いに《国会議事堂》、《楽友協会》、《美術アカデミー》、《証券取引所》を設計した 5 Gottfried Semper, 1803-1879 6 邦訳は浅井麻帆『一八九〇年代後半のウィーン分離派とゴットフリート・ゼンパー』『オーストリア学』23(2007、pp.1-10)に載った 7 Alois Riegl, 1858-1905 8 原著は1903年に執筆された論文「現代の記念物崇拜」に基づく。邦訳：尾関幸『現代の記念物崇拜：その特質と起源』2007、中央公論美術出版 9 Camillo Sitte, 1843-1903 10 Otto Wagner, 1841-1918

11 Wagner, Otto, 訳：樋口清、佐久間博『近代建築』2012、中央公論美術出版、p.32 12 Adolf Loos, 1870-1933 13 Rudolf Steiner, 1861-1925 14 Ludwig Wittgenstein, 1889-1951 15 Josef Frank, 1885-1908 16 根来美和「ウィーンにおける住空間の近代化 - アドルフ・ロースとヨーゼフ・フランクのテキスタイルによる空間分節を通して -」2015、p.18 17 Rudolph Schindler, 1887-1953 18『建築宣言』(1912)、Gebhard, David, 訳：末包伸吾/ルドルフ・シンドラー：カリフォルニアのモダンリビング』1999、鹿島出版会、p.149-151 19 Richard Joseph Neutra, 1892-1970 20 Lavin, Sylvia, 訳：金出ミチル『形態は欲望に従う：精神分析時代とリチャード・ノイトラ』2010、鹿島出版会、p.13、本書によれば、ノイトラは建築によってクライアントを「治療」できると考えていたという。21 Bernard Rudofsky, 1905-1988 22 Wien, Architekturzentrum and Research I. Getty. Lessons from Bernard Rudofsky : life as a voyage, 2007, Birkhäuser, p.15-17 において、ヨーゼフ・ホフマンが1897年、雑誌 Der Architekt にてカプリ島の住宅を紹介していたことが明らかにされている。23 Christopher Alexander, 1936- 24 Alexander, Christopher, 訳：中埜博『パタン・ランゲージによる住宅の生産』2013、鹿島出版会 25 Rudofsky, Bernard『建築家なしの建築』1984、鹿島出版会 26 いずれの書籍も、各項目ごとに写真とともに2単語程度からなる題がつけられている。27 Hans Hollein, 1934-2014 28 ホラインは「私の建築に対する考えは、一言でいうと二面性があるということです。[...] 結果、究極がよければいいということです。」(『ハンス・ホライン作品集』1985、a-u, p.16)と述べている。29 COOP HIMMELB(L)AU、1968年、ボルフ・ブリックス(Wolf D. Prix, 1942-)とヘルムート・シュビツィンスキー(Helmut Swiczinsky, 1944-)によって共同設立 30 表1 参照 31 伊藤哲夫氏が「ウィーンの都市空間と建築」(孝男養庭、伊藤哲夫、加藤雅彦、小宮正安、西原稔、松山哲彦、平田達治『ウィーン：多民族文化のフーガ』2010大修館書店、pp.43-126)で、ゴシックから世紀末ウィーンまでの建築にみられる特徴として挙げているものである。32 ノイトラは入手可能な一次資料が少なく、邦訳文献がないことから言説の抽出に至らなかった。また、精神分析学に傾倒していたために記述の真意を特定し兼ねることも要因である。さらなる研究に期待したい。33 特にボヘミア、モラヴィア、ガリチアなどでそういった農村が存続していたという(Johnston, William M, 訳：井上修『ウィーン精神：ハプスブルク帝国の思想と社会：1848-1938』1986、みすず書房、p.38)

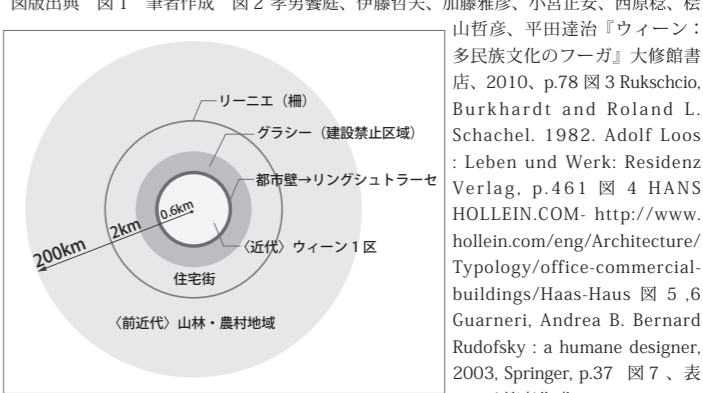


図6 ウィーン都市圏ダイアグラム

1,2は筆者作成

<目次構成>

序論

- 第1章 ウィーンの都市・建築史
 1. 古代から近世まで
 2. 18世紀以降の都市史

- 第2章 19世紀の先駆的建築家
 1. ゴットフリート・ゼンパー
 2. アロイス・リーゲル
 3. カミロ・ジッテ

- 第3章 世紀末ウィーンの建築家
 1. オットー・ワグナー
 2. アドルフ・ロース
 4 世紀末ウィーンの建築家と非建築家

- 第4章 20世紀の建築家1(-WW II)
 1. ヨーゼフ・フランク
 2. ルドルフ・シンドラー
 3. リチャード・ノイトラ

- 第5章 20世紀の建築家2(WW II -)
 1. バーナード・ルドフスキー
 2. クリストファー・アレグザンダー
 3. ハンス・ホライン
 4. コープ・ヒンメルブラウ

- 第6章 考察 「ウィーン的」なるものとその後構造
 1. 20世紀の建築家にみるウィーン精神の継承と展開
 2. 世紀末ウィーンの後構造 時間・空間の圧縮

結論

表1 建築家の主な言説

建築家	様式建築・モダニズム・その他同時代建築批判	人間のための建築設計
ゴットフリート・ゼンパー	芸術は唯一の主人を知っている。それは必要である (1834)	—
カミロ・ジッテ	今日では、果てしない直線道路の設計と非の打ち所のない規則的な広場の形成が、とりわけ重要と考えられている。ところがそれは、実際には全く無目的で、特になら芸術的感情というものをもち、労力を浪費しているにすぎない。『広場の造形』(1901)	—
アロイス・リーゲル	その基準を正確に定義するのは困難であったとはいえ、当時はまだ絶対的な芸術価値というものの存在が信じられていたし、「過去の芸術的創造は。現代の芸術家が苦勞して到達できる地点よりもさらに、絶対的な芸術価値に近づいていた」といった調子の説明が、古い記念物に高い評価を与える理由として通用していた。『現代の記念物崇拜：その特質と起源』(1903)	—
オットー・ワグナー	目を欺き、嘘に満ちた、ポチョムキン村を思わせるものやそのような系列にあるものはいくら非難しても非難しきれない。『近代建築』(1895)	室内の十分な光、快い温度、きれいな空気は、人間のきわめて正当な願望である。これらのことは、まだ10年前には達成できないものと見られていたが、幾つかの発明と改良によって完全に実現できるものとなった。『近代建築』(1895)
アドルフ・ロース	装飾は犯罪である『装飾と犯罪』(1908)	建築プロジェクトは内部空間から始まり外部に向かって順にデザインしていかねばならない『私の建築学校』(1913)
ヨーゼフ・フランク	均質化、色の調和、スタイル、あるいはモダニズムに関わるものを避けなければならない『住宅における新しい家具』(1928)	均質化と簡潔さは落ち着かない不安な状況をつくり出すが、装飾と多様性は落ち着きをもたらす、純粋な機能主義による痛みを和らげてくれる『住宅における新しい家具』(1928)
ルドルフ・シンドラー	構造に基づいた様式は廃れた。機能主義は、保守的な様式主義者に現在の技術を開発するように導くうわべだけのスローガンとして使われた。『建築宣言』(1912)	部屋は、こうした過去から続く庇護感を呼び起こして、「快適で居心地のよい」ものとするべきである『建築宣言』(1912)
リチャード・ノイトラ	—	—
バーナード・ルドフスキー	バックミンスター・フラウあるいは故フランク・ロイド・ライトといった外交的な人の作品が紹介されるのは、作品そのものの優れた特質の故とはかぎらず、むしろその奇抜さの故である『人間のための街路』(1969)	私の目的は、家というものに具体的に現れている信念と疑念のいくつかを検討することにある。そこから快適性に関するわれわれの色々矛盾した考えを抽出し、[...]できれば、現代の数々の制約を唯々諾々として受け入れて多くの楽しみを逸しているということを読者に知って貰いたいのである。『裏から見た現代住宅』(1955)
クリストファー・アレグザンダー	人間生活の垢がしみこんでいる古い都市と比較したときヒューマンな観点から見ると我々の人工的に都市をつくるという行為は完全に失敗でした『都市はツリーではない』(1965)	すべての建築の目的、その幾何学的構成の目的とは、生き生きとした場所をもたらすことである。『バトル』(2012)
ハンス・ホライン	建築家は建築物だけで思考することをやめねばならない「すべては建築である」(1968)	これらの急激に発展するフィジカルな可能性は、人工的環境の心理的な可能性をより視覚に入らせることになる。[...] そうなると人間は空間を規定するもの真なる中心点であり、出発点となるのである。「すべては建築である」(1968)
コープ・ヒンメルブラウ	70年代がいかにひどかったかは、そのおかたい建築を見ればわかる。ピーダーマイヤー様式の簡素なファサードには、世論調査と重々差の民主主義が蠢いている。われわれはピーダーマイヤーを建てようなどとは思わない。いまま、過去も未来も。パッラーディオなどの歴史的仮面は見飽きている。建築では、不穏なものをすべてを廃除はしたくない。『建築よ燃え上がれ』(1980)	建築の中で暮らすためにわれわれが変わるべきだなどということはなく、われわれがその中で暮らしたくなるように、建築のほうが人々の動き、感情、気分、情動に反応すべきだ。「われわれが変わるべきだなどということはない」(1970)

表2 ウィーン出身の主な建築家年表

